

第8回 比較農業技術研究会(東南アジア大陸部稲作圏における農業近代化以降における技術展開の国際比較：「京都大学東南アジア研究所国際共同研究拠点Ⅱ型プロジェクト」)

日時：2017年10月17日(火曜日) 15:00～17:00

場所：東南アジア地域研究研究所東棟第1会議室(E107)

参加者：安藤、柳澤、小林、浅田、内田、赤松

発表者：柳澤雅之、小林 知、安藤和雄

(以下に要約(順不同))

柳澤雅之

国民国家が形成されて以降の在地の技術の変化の歴史を理解するには、ソフト・ハードの両面で、国家の役割が決定的に重要である。ベトナムとインドネシアの農林漁業におけるローカルな技術の変化における国民国家システムと在地の技術との関係についてのアイデアを展開した。



写真：マカッサル港では現在も、中小規模のボートオーナーが所有する多数の木造船が現役で使われている。

小林 知

熱帯モンスーン気候のもとにあるカンボジア農村の住民の生活には、乾季と雨季という生態のリズムを基調とし、多様なマイナーサブシステム(経済的にはマイナーな位置づけながら、その技能に秀でることがコミュニティ内で社会的・文化的に高く評価される諸活動。例えば非木材森林産物の採取や、農閑期の遊び仕事など)がもともと存在した。

現在のポーサット州・カルダモン山脈の低地から山地にかけての地域一帯をみると、稲作、畑作それぞれの耕作リズムを基調とし、もともと存在したマイナーサブシステムが継続していることも確認できるものの、近年は地域外への出稼ぎが主要な活動となっている。他方、域外へ出るか出ないかという世帯の選択には、農地の所有規模や栽培する作物の耕作リズム、世帯労働力の個別条件が関わっており、一般化は難しい。ただ、今後この問題についてカンボジア以外の地域と比較を進めることが、アジア農村の離農・過疎化という共通の問題を考える1つの糸口となり得るだろう。



写真：カルダモン山脈の山稜の村で住民と土地利用図を作成する（カンボジア、ポーンサット州プロムクロヴァーニュ郡）

次回 1月29日（月） 15：00～ セリムの発表